



Title	固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントの手法に関する研究
Author(s)	松本, 有二
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/54298">https://hdl.handle.net/11094/54298</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	まつもと むつじ 松本 有 二
博士の専攻分野の名称	博士（経営学）
学位記番号	第 23547 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経営学系専攻
学位論文名	固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントの手法に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 浅田 孝幸 (副査) 教授 金井 一頼 准教授 関口 倫紀

## 論文内容の要旨

### 第1章 プログラム・マネジメントの基本的概念と課題

企業の全体最適の実現を目指すための考え方として、プログラム・マネジメントが提案されているが、具体的な方法論がないのが現状である。そこで、プログラム・マネジメントの方法論として固定収益概念を利用することを提案し、その可能性について検証することを本稿の目的とした。

### 第2章 固定収益について

本章では、固定収益概念とその概念を利用した固定収益会計を概説し、先行研究のレビューを行っている。固定収益概念とは、顧客関係性に着目して顧客をセグメント区分し企業の財務業績に与える影響を評価することを目的としたものであり、固定収益会計とは、顧客セグメントごとに収益、費用、利益、キャッシュフローなどを測定するための会計である。先行研究として、固定収益の考え方をういた損益計算書や差異分析に関する研究があり、また、収益性に関わる新しい研究分野であることがレビューにより示唆された。

### 第3章 固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントの基本的枠組み

本章では固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントの基本的枠組みについて説明する。

### 第4章 固定収益の財務的效果について

本章及び次章では、固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントを取り入れることによって期待される効果について検証を行う。本章では財務的效果を、次章において非財務的效果を検証する。

財務的效果については、固定収益化が図られることでどのような効果が期待できるかを定式化し、更に実際の企業データを用いた統計分析とシミュレーション実験を行うことで確認した。その結果、固定収益化を図ることにより、財務的效果として、収益変動の抑制、収益成長、資本コストの低減に貢献する可能性があることが示唆された。

### 第5章 固定収益の非財務的效果について

本章では、固定収益の非財務的效果について、事例研究の方法により仮説を検証する。

2社の企業に協力をいただき、インタビュー、社内資料の閲覧等による調査を行った。初めに企業内での利用

状況を確認し、次に非財務的效果の有無と効果の概要を確認した。

調査の結果、両社とも仮説として掲げた効果が概ね観察された。

### 第6章 結論と今後の課題について

本稿の結論として、本稿の提案は肯定的なものと考えられる。しかし、より実践的なものとするための研究課題、例えば、業績測定や責任会計などの課題について議論する。

## 論文審査の結果の要旨

### 〔論文内容の要旨〕

本研究では、プログラム・マネジメントのための具体的な方法論として近年提唱されている固定収益概念を利用することを提案し、その可能性と課題について検証することを目的として以下の構成で研究を行った。

第1章のプログラム・マネジメントの基本的概念と課題について説明している。すなわち、企業の全体最適の実現をめざすための考え方として、プログラム・マネジメントの概要を説明し、その具体的な方法論としての固定収益概念の利用についての提起を行っている。プログラム・マネジメントの特徴を言及する上でPPBS（プランニング・プログラミング・バジェット・システム）についてもアベンデュクスで検討している。

第2章では、固定収益概念とその概念を利用した固定収益会計を概説している。なお、固定収益会計とは、固定収益概念と顧客関係性に着目して顧客をセグメントごとに収益、費用、利益、キャッシュフローなどで測定するための会計であり先行研究としては、顧客関係性マネジメントとセグメント会計からの研究が本研究の基礎であることを説明している。

第3章では、固定収益概念を利用したプログラム・マネジメントの基本的枠組みを説明している。プログラム・マネジメントは、すでに第1章でも説明しているが、この章では、固定収益会計を前提にした組織全体最適をめざすプログラム・マネジメントの具体的な内容としては、1つは複数のプロジェクトのシナジー効果を生み出すものであるか。2つめは、企業全体の使命を達成するための必要な方法であるかの視点を基礎に考察している。次の4章と5章は、方法論の意義を2つの側面で明らかにしたものである。

第4章では、固定収益の財務的效果について、実際の企業データを利用したモンテカルロ法によるシミュレーション実験によって財務的效果を確認した。なお、財務的效果としては収益変動の抑制、収益成長、資本コストの低減に貢献する可能性があることが示唆されている。

第5章では、固定収益の非財務的效果について、事例研究により仮説検証型の研究を行い、企業内でのこの方法論の利用状況とその非財務的效果の有無を明らかにした。

第6章は、本研究の結論であり、本研究の主題である、プログラム・マネジメントの実践的な方法論の意義をまとめ、追加的な課題とこの研究の限界を指摘した。

### 〔審査結果の要旨〕

本論文は、企業戦略を実行する上で重要な方法論とされている、プログラム・マネジメントについて、アメリカ合衆国における、PPBSとの比較など過去の研究との比較と本方法論の実行可能性を強く意識しながら、企業で利用されるべきプログラム・マネジメントの新たな方法論である固定収益会計を基礎にしたプログラム・マネジメント手法の提案に果敢に挑戦した論文であり、具体的な手法の意義を財務と非財務の両方で確認することに一定の成功を収めている。しかし、個別的理論としての課題や限界もあり、一般化する上で依然としてその課題は、大きいと言える。このようなことから、本論文は宿題を残してはいるが、実践的にも理論的にも価値ある研究となっており、博士（経営学）の学位に十分値するものと判断する。